



KANSAI  
UNIVERSITY

# 教職支援センター年報

2022

関西大学 教育推進部  
教職支援センター

# 『教職支援センター年報 2022』 目次

## 投稿原稿

### <報告>

小学校生活科教科書における飼育に関する内容の比較分析 関西大学文学部教授 岩崎 保之……………	1
--	---

### <小論文>

ウェルビーイングを高める総合的な学習の時間 -コロナ禍を経験した中学2年生へのアンケート調査とフィールドワークから- 関西大学非常勤講師 新谷 龍太郎 大阪大学大学院 秋山 みき……………	11
---	----

外国にルーツを持つ生徒にとっての Third Culture Kids (TCK) という位置取り 関西大学非常勤講師 森川 与志夫……………	23
--	----

### 「これからの教員育成と進行形の教育課題

～教職を志す学生の思いを知り、その支援につながる教育委員会の取組に学ぶ」

関西大学特別任用教授 黒谷 聡 吹田市立教育センター所長 草場 敦子……………	30
--	----

### <ショートレポート>

根源的な自発性を自発的に涵養する一国語科教育法という場 関西大学非常勤講師 榎井 英人……………	44
---	----

### 1. 教員の養成の目標

関西大学教職支援センターの基本理念……………	50
------------------------	----

### 2. 教員の養成に係る組織

教員の養成に係る組織……………	51
教職支援センター規程……………	53
教職支援センター自己点検・評価委員会規程……………	57

### 3. 教員の養成に係る授業科目

教職に関する専門教育科目担任者一覧……………	59
------------------------	----

### 4. 教員免許状の取得の状況

各学部・大学院で取得できる教員免許状の種類・免許教科……………	64
学部別介護等体験 参加者数……………	66

学部別中学校・高等学校教育実習生数	67
教員免許状取得者状況（学部・大学院）	68
教員免許取得までの諸手続き	75
5. 教員への就職の状況	
【校種別】公立・私立教員採用試験合格者数	76
【学部・研究科別】公立教員採用試験合格者数	77
教員採用選考に係る「大学推薦」の応募・合否結果	78
6. 教員の養成に係る教育の質の向上に係る取組	
介護等体験の取り扱いについて	79
「①教育実習事前指導登録ガイダンス」について	80
「③教育実習事前指導履修者対象ガイダンス」について	82
「⑤教職実践演習（中等）履修者対象教職課程・教員養成フォーラム」 について	84
教員採用試験合格者との情報交換会について	86
教職課題研究会について	88
教員採用内定者との懇談会	89
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～	90
教員採用試験 面接対策セミナー実施状況	91
教職ガイダンス日程	92
7. その他	
関西大学教職支援センター年報投稿規程・執筆要領	93

## <小論文>

### 「これからの教員育成と進行形の教育課題 ～教職を志す学生の思いを知り、その支援につながる教育委員会の取組に学ぶ」

関西大学 特別任用教授 黒谷 聡  
吹田市立教育センター所長 草場 敦子

#### 序

令和4年12月文部科学省は12年ぶりに「生徒指導提要」を改訂した。その背景には「子供たちを取り巻く環境が大きく変化中、いじめの重大事態や児童生徒の自殺者数の増加傾向が続いており、極めて憂慮すべき状況」（生徒指導提要まえがきより）があり今日的な課題に対応することを急務としていると言える。それほどにこの12年間の「子供たち」を取り巻く環境の変化や多様性の進展は激しく、驚かざるを得ない。

関西大学で教職科目を担当する機会を得て4年（8学期）が終わろうとしている。小学校現場からの「転職」は、私にとっては未知の領域への魅力と不安に溢れたスタートであったことを今も覚えている。自分の思い描いていたものとは随分違う学生や大学の様子に戸惑いながらも少しずつ慣れてきたと実感する中で、「それ」はやってきた。校種、年齢に関わらず、児童・生徒・学生だけでなく教員にとっても大きな転換点を意識せざるを得ない状況、すなわち、コロナ禍における学校対応を余儀なくされた時期に学びの場にいたという「コロナ世代」を生きてきたのである。

今までも、学校現場でいわゆる転換点は何度も訪れた。それは「学校5日制」であったり、「ゆとり教育」であったり、あるいは「開かれた学校」であったり、「安全確保」であったりとその時々を反映して学校は揺れを意識してきた。

しかし、今回の「コロナ禍」は世界的な物流の停滞や命の安心など、これまでのうねりとは違う形で「こどもたち」の生活を直撃した。そして、それは今もなお、常に意識のどこかにあるものとして確かに存在している。

2020年2月からの学校の閉鎖は突然の措置として現場に大きな混乱をもたらした。

GIGA スクール構想は本来の導入を前倒しにして2020年より学校現場に1人1台のタブレットの配布という形からスタートを切った。全ての校種で「3密を避け、オンラインで、人との距離をとる」ことが求められた。昨日までの「寄り添う」「コミュニケーション力」「困っている子に関わる」というキーワードは空虚なものとなりつつあった。学校は教科指導、生徒指導のほかに安全確保を担うことを求められますます教職員の責務は重みを増した。

そして今なお、毎日のように新たな課題が生まれ、また普遍の課題が再認識されている。

生徒指導提要の改訂を待たずとも学校現場では「子供たち」の変化を目の当たりにしながら日々の取組を重ねてきている。この機会にその取組を知ることは、学校現場における今日的課題に触れ教職をめざす学生に学びを提供する私にとっても、ものすごく大きな意味と価値があると考えた。

この論文では、この状況下で教職をめざす学生をどのように育成していくのかを教育委員会の喫緊の取組から考察をすすめていきたいと考える。前職まで私が38年間教員として勤めた吹田市教育委員会の教育センター所長草場敦子氏との共著として論を進めたい。

1	はじめに ～教職をめざす関西大学学生に感じるもの……………	黒谷
2	教育は薫陶:大人が創る「空気」が子供が育つ「環境」になる……………	草場
3	吹田市の挑戦①—いじめの未然防止の取組とその先の取組—……………	草場
4	吹田市の挑戦②—デジタル・シティズンシップ教育—……………	草場
5	これからの教師に求められること……………	草場
6	まとめにかえて……………	黒谷

## 1 はじめに ～教職をめざす関西大学学生に感じるもの

現在まで私が授業で担当した学生は、人権教育論(5期)教職概説(3期)教育実習事前指導(6期)教育実習(二)(5期)教職実践演習(中等)(5期)の延べ約1100名である。そのほかに、教職相談や面接セミナーなどで、毎年100名近くの学生と出会う機会を得ている。

子どもたちにレッテルを軽々に貼ってはならないと話すが、その多くの学生たちに敢えてレッテルを貼るとしたら、一番に浮かぶ言葉は「まじめ」だ。自分の学生時代と比べることはナンセンスであるのは十分承知のうえで、先入観を除いてみても本学の教職をめざす学生は極めて「まじめ」なのだ。

どうも当たり前のことらしいが、ちゃんと出席する。ちゃんとレポートを提出する。ちゃんと授業中起きている。とにかく「ちゃんとしている」のだ。出席だけで成績をつけたら「秀」だらけになってしまう。教職概説や人権教育論などほとんどの学部生を対象とする科目では、前の授業の学舎から息を切らせてくる学生もいる。いつも最前列に構える学生も。彼女、彼らは学ぶ姿勢があることは間違いがないと思う。恐らくどの授業も当たり前だと笑われるかもしれないが、出席率は9割を大きく超える。

私はできるだけ学生の名前を覚えたいと常々考えてきた。小学校教員時代(38年)から大事にしてきたことだ。名前を呼ばれることで距離を縮めることができると今も確信している。しかし、30名なら何とかあったが、70名90名150名のクラスでは如何ともしがたい状況となった。それでも教職の学生に「なまえ」の大切さを説く限りは努力したいと考えていた。

レポートの提出はそんな名前を覚えるチャンスでもあった。レポートを読みその名前を何度も見ることで、こちらからの距離は少し近づいた気がした。そのレポートを集約して次の授業で提示すると意外なほどに反応があった。自分の意見を見つけた時に何とも言えない笑顔を見せる学生もおり、「認められる」ことへの喜びは多くの学生が感じることに気が付いた。ときどき「〇〇さん」と名前を呼ぶと驚いた表情を見せるが「うれしい」と言葉に出す学生も少なくはなかった。大学でも学生との距離の詰め方を間違えなければ、講義もうまくいくのではと何となく感じ出したところでの「コロナ」であった。

オンラインも対面となってからの「マスク」も列の空いた座席配置も、私にとってはマイナスでしかないと思われた。

最初は、講義資料を提示してレポートを提出してもらおうという形で対応した。ZOOM での授業など工夫される先生方もおられる中、100名近くの学生にそれは難しいと判断し自分のスキルのなさ

もあつての講義形式だった。

できるだけ多くの意見を共有することで自分の知見を拡げてほしいと考えてはいたものの、あまり大きな期待は正直していなかった。レポートの提出には相変わらずまじめに取り組んでくれた学生たちであったが、対面でもない友だち(と呼んでいいかどうか)の意見をしっかり受け止めることはできるのかという懸念もあった。

しかし、思いもよらない展開が生まれた。

以下斜体字部分は、2021年春学期の人権教育論第8講のレジュメからの抜粋

(※)は注釈

### ◎前回の授業資料を読んだ感想(※講義資料冒頭)

皆さんのレポートを読むのを楽しみにしています。皆さんもお互いの意見に触れて、思いを寄せたり深めたりしながら共感を強くしていることがわかり嬉しい気分になります。

私が入権について考えるときに大事にしているのは「自分の当たり前を疑う」ということです。人はそれぞれ生きてきた環境や経験の違いから考え方にも違いが生まれます。

人の意見に触れることで、その当たり前が少しずつ新しく変わっていくこと(場合によっては大転換することも)が学びだと考えています。そして、学びは早ければ早いほど良いと思っています。もちろん、その学びはずっと続きますし私自身も今も皆さんから毎回学んでいます。

コロナ禍で対面はまだ叶いません。滅入りそうですが負けてはいられません。知識を増やしましょう。感じる心を大切にしましょう。今回も、クラスの人の意見に触れることからスタートです。

(※7講目の資料中の学生の意見)

「小学校の時、支援の生徒と遊ぶ機会があった。事前授業で「助けてあげましょう」「支えてあげましょう」というような指導が多かった気がして、今思えばなんだか変な気がします」

※上記の意見に対して学生からの反応(学生のレポートよりの抜粋、要約)

- ・ 「たすける」といった概念よりは「共によりよい生活を求めて生きる」ことが重要であると感じました。
- ・ 彼らとコミュニケーションをとる、彼らを助けるということもまだしたことがありません。介護等体験を通じて学びたいと思います。
- ・ 思いやりの押しつけは本人にとって苦痛なのではないかと感じる。思いやりの心を持ち健常者が障がい者を助けてあげようというのは違和感がある。「障がい者はできないから」といったようなニュアンスを感じるのだ。
- ・ その子が特別扱いされているを感じさせないように、単純に一生徒として扱っていることを重要視していたのではないかと思う。そういった些細な配慮が障害を持つ児童、持たない児童双方の心情に大きな印象を与えるのだと思う。
- ・ 違和感を私も大事にして子どもたちにも、「その考えはおかしいよね」と気づけるように指導したいと思いました。皆の回答を見て、自分と似ているものもあれば全く思いつかなかった点もあり、自分が教員としてこのような経験をする時には周りの人たちの意見を聞くことも重要

になってくるのではないかなと感じました。

- ・ 児童の成長には同じ世代の仲間との交流が必要不可欠だと思います。障がいをもって  
いるからといって、大人によって同じ世代の仲間と戯れ、一緒に成長していく機会を奪われてし  
まうのは残念なことだと思います。
- ・ 差別や排除をしてはいけないということを感じる前から私たちは同じ校舎で共に学ぶ友人  
であり、そこに上下はありませんでした。だからこそ、支援学級の児童を自分たちより弱いも  
のの教え、助け守るべき存在のように指導されたことを不思議に思ったのかもしれませんが。
- ・ 向き合えば向き合うほど、その人権問題で登場する言葉に敏感になる。差別感情があるわ  
けではない(と信じたい。)しかし、敏感に反応すると同時に、身構えてしまう。言葉で表現す  
るのは難しいが、この気持ちは、何なのかだろうか。今は、はっきりとわからないが、人権問題  
と一緒にこの気持ちと向き合っていきたいと思った。
- ・ 友人は「できるだけ、自分で何でもしてみたい」と考えていた。その考えを知っていた私は、  
先生から「助けてあげて」と言われていたが、できる限り手伝うのではなく、見守っていた。助  
けないと友達ではないとの発言は、どこか引っかかる。
- ・ 「助けてあげましょう」などの言葉は僕も不自然に感じます。もちろん、誰かの助けが必要に  
なる場面はあると思います。そういったときは生徒同士が協力し仲間意識を持たせることが  
重要ではないかと考えます。
- ・ うまくことばに出来ないけれど、彼らだけが支援を必要としているのではなくて、みんなどこ  
かしら補い合う必要があると思うから後者のようにお互いに助け合ったり支え合ったりという  
言葉を使うことで違和感がなくなる気がした。
- ・ 支援教育の話も先週のベトナム人の生徒のような在日外国人の話も繋がっていて特別扱  
いするのが良いというわけではなく、どれだけ他の生徒と同様に接する中でサポートすること  
が出来ることがキーポイントになってくるのかなと考える。
- ・ 同じ教室と一緒に授業を受けた方が楽しいだろうし(そうでない子もいると思いますが)、大  
人になったらどんな人であれ周りの人と上手くやっていかなければならないときがあると思  
うので、できる科目は教室で受けるというのは大事なことだと思います。
- ・ 「助けてあげましょうの指導に違和感を」にとても共感します。どうして障害を持っていること  
が可哀想と言われなければならないのかよく話をします。私は姉として弟が障害を持ってい  
るがために特別不幸だとは感じません。当事者であれば何でもかんでも助けてほしいわけ  
じゃないと思う人はたくさんいると思います。たしかに助けがいる機会は多いのかもしれませんが、  
障害を持っていなくても助けが必要な人はいます。勉強が苦手な子には分かる子が教  
えてあげればいいし、運動が苦手な子には得意な子がコツを教えてあげればいいはずで  
す。障害の有無にかかわらず「困っている様子の人」が助けを求めていたら助けてあげましょ  
う、支えてあげましょいう指導が良いのではないかと思います。
- ・ 私は「必要のない時に恩着せがましく他の人が手伝ってきたらどのように感じるか」とい  
う視点が重要ではないかと考える。
- ・ 彼女は体育の授業でもクラッチを使ってドッジボールに参加し、水泳の時間には担当の先生  
の付き添いの下でプールに入っていて出来る限りの範囲内で周りのみなと同じように授業

を受けていて、本人も楽しそうでした。そんな彼女の様子を見てきて、私は障害のある児童は自分のできる範囲でみなと同じように授業を受けることが本人にとってよいことなのではないかと感じました。

- ・ 基本的には支援の有無にかかわらず同じ教室で学ぶことが大切であると思った。具体的には、支援が特に必要でない子どもたちも社会に出れば、支援が必要な人などに関わる機会も多くなると思うので、クラスといういわば小さな社会から社会勉強も兼ねて、クラス全員で学ぶことが大切であると考えた。
- ・ 母は小学校で特別支援員をしているので、ものすごく大変そうでした。今の小学校で問題になっているのは、障害を持っているときちんと診断されて支援学級に通っている生徒よりも、明らかに何らかの障害をもっていると思われながらも病院に連れて行かずに診断されていない児童、いわゆるグレーゾーンの児童らしいです。
- ・ 特別支援教育を受けている児童にとって、学校の間というのは特別なものであって、児童たちとたくさん触れ合うような努力をしていたと思うと、もっと積極的に話しかければよかったなど当時を振り返って思いました。
- ・ 「あげましょう」の指導に違和感を覚えたという意見があって、正直わかるなあと思いました。その一方、市バスに乗った時、大人の障がいを持った人にひどく絡まれた経験があって、そこから少しどういふ対応をしなくてはいけないのかが分からなくなる時があります。
- ・ 担任の先生は、特別扱いのようなものはなく普通に接していて、クラス活動をする時には私たちにその子達の配慮はどうしたらいいのかという問いを投げかけたりしていたので、クラスのみならず先生と同様にその子達を特別扱いするというよりは、できることできないことを分かった上であとは普通に接していました。そのため、クラスで2人がのけ者扱いされたり浮いたりすること無く、すごく溶け込めていたように感じます。
- ・ 違和感を持ったという意見に賛成である。同じ学年であるのに、上から目線のような発言で障がい者を傷つけてしまうかもしれないからである。私はこのことから24時間テレビのことを連想した。
- ・ 障がい者っていうのは生まれながらに障がい者なんじゃなくて、たまたまその時代にとっては障がい者ただだけで、みんな時代が違えばそうかもしれない…… たとえば私は運動がかなり致命的にできなくて長座体前屈がマイナスだったりして。
- ・ 障がいや病気を持った人は可哀想ではないと教えてもらうこともありましたし、わかっているつもりではいたが心のどこかではそういう風に見てしまっていた自分を思い出しました。人権学習をした後の授業の感想でもきれいごとを書くだけ書いて、本当の意味で理解しようとしていなかったのではないかと今までを振り返って感じました。

(※以上レポートより1部抜粋)

いかがだろうか。1人の学生の感想に対して実に様々なレスポンスを返している。もちろん、特に優れた意見を掲載したわけではない。

私が最も驚いたのは、文字上のやり取りに学生が真剣に向き合っていたという点にあった。思いもよらない展開とはそういうことなのだ。ここには掲載しないが、毎回、私に対する意見や質問もあ



り、それに対しても紙面でお答えすることを心掛けて話題がみんなの中で共有されることを大事にしていた。自分の経験や今の自分の生活、様々な角度から意見を交わし関わろうとしている姿に、私は感動すら覚えたことを今も忘れない。これはごく一部の例であり、外国にルーツのある子のこと、セクシャリティの問題、部落差別など様々な課題についても同様なやり取りが生まれていたことは言うまでもない。

ただまじめだけでなく人と関わろう、自分の思いを伝えたいというのも本学の教職をめざす学生の特質の一つではないかと思う。こうしたやり取りの中で（私も積極的にやり取りを楽しんでいたが）自分のことを語ることでできる学生が出てきた。自分の立場をカミングアウトする学生が出てきたのだった。ちゃんと受け止めてくれる仲間、無視をしない仲間を意識したからこそ生まれた産物であったと思える。

ただ、これはオンライン、対面に関わらずに現れたことで姿が見えなくても繋がれるのではないかと思えた出来事だった。教職をめざす学生の「まじめ」には相当大きなポテンシャルがあると思う。このまじめさにこたえるために今の教員の学校の課題を明らかにし、その「しんどさ」も「楽しさ」もしっかりと提示することこそ、今の大学に求められているのではないだろうか。そして、本学の学生にはそのことをしっかり受け止めて考えを深める素養があると思う。そのためにもリアルな現場の取組を知ることが教育実習やスクールボランティアと同様に大きな力となるのだと確信している。

次章からは、本学の所在地である吹田市で行われている「いまの」取組について書いていくことにしたい。吹田で行われていることは決して、吹田にとどまらない現在の学校の課題に合致しているはずだから。

## 2 教育は薫陶：大人が創る「空気」が子供が育つ「環境」になる

吹田市は人口約38万人。今後も人口増加が見込まれる中核市である。

公立学校数は、小学校36校 中学校18校。児童生徒合計約3万人に対し、教職員は約2,000人。

本市では教育理念を「今 吹田から 未来の力を 生命かがやき ともにつながり 未来を拓く吹田の教育」としている。

私が勤務する吹田市立教育センターは、教職員研修、情報教育、調査・研究、教育支援教室、教育相談等の事業を通して、学校教育を推進かつ支援している。令和2年度から吹田市が中核市に移行したことにより、法定研修をはじめ、教職員に関わる全ての研修を「ともに学び ともに育つ」人権教育を基盤にトータルコーディネートしている。

私が小学校現場から教育センターに赴任して4年の歳月が過ぎようとしている。

教育センター所長として、年度の初めに力を入れている仕事の一つに初任者研修での講話がある。年間に多くの研修を実施し、初年度の教員の骨格を学ぶと言える研修のうち、着任式直後にある開校式と、始業式を終え1週間ほど子供たちと過ごした時期に開催する研修の合計2回。この2回は、教育センター所長として初任者と対面で話すことができる貴重な時間である。私は、この2回を通して「教育は薫陶」であることを、学校現場の様子と関係づけて話をするにしている。なぜ

ならば、これまでの教員としての経験則や様々な研究結果から、学級風土や学校風土が子供の行動にどれほど大きな影響を与えるのかということが何より大切であるということに確信を持っているからである。

開校式。毎年、会場は程よい緊張感に包まれる。話を聞く姿から「気概」と「覚悟」が感じられ、心が熱くなる。そして、「OJTとOff-JTの互恵的営みにより、しっかりと育成しなければ」と心に誓う。令和4年度の開校式では、「発する言葉について、吟味してほしい」と伝えている。相手に共感することで生まれる「吟味された言葉」はあたたかい。それに対して、吟味せずして感情に任せ発した言葉は配慮に欠ける。発した言葉が原因となり、保護者や時には子供との関係悪化につながってしまうケースはよくある話である。

続く第2回目の初任者研修では、「すべての子供は幸せになる権利を有している」ことを前提として伝えることにしている。そして、「子供を一人の人間として、きちんと受けとめてほしい」と話すのだ。なぜならば、一人一人の子供を理解するということがすべての土台にあることをしっかりと心に刻んでおいてほしいからである。そして、その理解とは何かということを一ひとりの教員が真に受けとめて考えることを「あたりまえ」のこととしてほしいと強く思う。

子供は安全で穏やかな学級風土・学校風土の下では、積極的に人とかかわりあおうとし、お互いを尊重し持てる力を存分に発揮することができる。だからこそ、「魅力ある学校づくり」の取組は子どもを守り育てることに繋がるのだ。そのことを、私たち吹田市は学校現場と教育行政が一体となって全体で推進していかなければならない。

次の章より、吹田市の挑戦と題して、「魅力ある学校づくり」をめざすために進めてきた①「いじめの未然防止の取組とその先の取組」と②「デジタル・シティズンシップ教育」を紹介する。

### 3 吹田市の挑戦① ーいじめの未然防止の取組とその先の取組ー

#### (1) 「すいた GRE・EN スクールプロジェクト」

学校現場では、いじめが起きにくい学級風土・学校風土を醸成するため、道徳の授業をはじめ様々な教育活動に取り組んできた。また、個々の子供の困り感、問題行動の芽を見つけるために、毎学期アンケート調査を行い、そこから明らかとなった問題の背景に迫ることで解決策を練り対応してきた。

しかし、社会の多様化・複雑化に伴い、子供もそれを取り巻く環境も多様化・複雑化している。情動の爆発的な表出、内在化したストレス、複雑に絡み合う要因。これまで培った感覚や経験則では、問題を的確に見抜き、適切な対応策についてプランニングすることが難しい状況が少なからずみられるようになった。

そんな中、いじめに係る重大事態が生起し、子供も大人も大きな傷を負った。いじめや虐待、自殺など子供に関わる悲劇は、すべて大人に起因すると考える。子供に関わる全ての大人が真摯に向き合って全力で最善策を模索する責任がある。

その前提を踏まえて本市では、いじめ防止の取組として学校・教育委員会・市長部局が一丸となって「すいた GRE・EN スクールプロジェクト」を立ち上げ取組を進めた。「すいた GRE・EN プロジェクト」は早期発見・早期対応の取組と未然防止の取組から構成される。

早期発見・早期対応策としては、一人でも多くの目で子供を見守り、かつ専門的知見をもって

介入できるよう、人的配置及び連携強化に取り組んだ。最も検討を重ねたのが未然防止のための対応策だった。いじめはどこにでも起こりうるものであるからこそ、未然防止は何よりも大切であると考え、再現性のある科学的根拠に基づいたいじめの研究や予防プログラム開発の実績がある公益社団法人子どもの発達科学研究所と連携し、【いじめ予防推進事業】の取組をスタートさせ現在に至る。

(2) 課題未然防止教育—いじめ予防事業：「いじめ予防授業」

いじめ予防事業は「調査」（「学校風土・いじめ調査」と「教職員研修」そして各担任が市内共通のワークブックを使って授業を行う「いじめ予防授業」の3つをパッケージとしている。

「教職員研修」は専門研修・各校リーダー研修・予防授業を行うための一般教職員研修の3種類がプログラム化されており、令和2年度から各校1名対象にリーダー研修を行い校内研修実施可能とするため人材育成を開始し、今年度で3年目。市内には校内研修講師を務めることができるリーダーが約150名以上存在する。

いじめ予防授業「TRIPLE—CHANGE」では、各担任が市内共通のワークブックを使用して、合計3時間の授業を行う。「TRIPLE—CHANGE」の特長は大きく2点ある。

1点目は「正しい知識を得る」→「正しい行動について考える」→「集団を変えるために行動する」の3つのステップを積み重ね、子供たちが集団作りに主体的に参加する力を育ていけるよう構成されていることである。

FIRST—CHANGE「正しい知識を得る」では、小学校1年生から「いじめの法的定義」といじめかどうか見極めるための共通語となる「アンバランスパワー」と「シンキングエラー」という言葉について学んでいる。(法教育)

SECOND—CHANGE「正しい行動について考える」THIRD—CHANGE「集団を変えるために行動する」では、傍観者に対する教育(アップスタンダー教育)を重視しており、「や・は・た」行動(やめてという・はなれる・たすけをもとめる)「HERO」行動(H:HELP・E:EMPATHY・R:RESPECT・O:OPEN—MIND)を通してSOSの出し方やソーシャルスキル等について学んでいる。このような内容となっているため、3時間の授業にとどまらず、日々の教育活動の中で学んだことを生かしていくことになる。

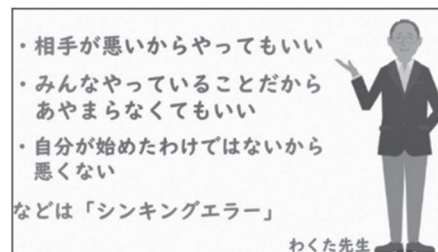
これらのいじめ予防事業を通して、教職員や子供たちに確実に力がついてきた。その一方で、実際にいじめが生じた際の子供たちへの指導や支援を行うための科学的根拠に基づいたプログラムが日本にはまだないということが課題として明らかになった。そこで、支援プログラム・指導プログラムの開発と予防プログラムのバージョンアップをパッケージ化・アプリ化することを目標に令和3年度文部科学省委託事業を受託し、公益社団法人子どもの発達科学研究所から全面協力を得て、学校現場の教職員が考えたストーリーを基に動画コンテンツを作成した。

(3) 令和3年度文部科学省委託事業「いじめ対策・不登校支援等推進事業」：いじめに対する理解を促す動画教材の開発・実践

動画コンテンツは、「いじめられたとき」(7本)「シンキングエラー」(8本)「いじめをなくそう」(7本)「ともだちづきあい」(9本)の合計31本(1~3年生用12本・4年生以上19本)あり、12月に文部科学省から提示された「生徒指導提要改定版」において、体験的な学びを行うための教材例として掲載されている。



この動画コンテンツの開発は、子供たちが人と人との関わり合いを疑似体験する機会を設ける一助となった。また、この取組を通して、さらに児童生徒一人一人の状況を理解し、個別に支援する視点からのアプローチの必要性を再確認することとなった。そこで、令和3年度に引き続き、文部科学省委託事業を受託し、「いじめ・不登校等の未然防止に向けた魅力ある学校づくりに関する調査研究」を継続することにした。



### 《学校現場の声》

(令和4年度文部科学省委託事業報告会 魅力ある学校づくり研究会発表者原稿より引用)

- ・ いじめ予防授業は、中学校でも3年目の実施となります。実施した教員に意見を聞くと、まず毎年、いじめについて確認し合い、学んだことを思い出しながら定着を図ることはとても大事なことでと多くの教員が答えました。
- ・ いじめ予防授業の価値は、子どもたちが困っている出来事や人間関係について、これはいじめだと明確になることです。いじめは正しいことではありません。一年生の子どもたちであっても、その行動が正しくなかったことが分かります。さらに、クラスや学年、学校集団全体でも、いじめは正しくないのだから、被害者が我慢する必要はない。声をあげていいんだという共通認識が作れます。学校全体で取り組むことで、学年を超えて問題が起きた際にも、同じルールで考えることができます。実際のトラブル解決の際に、「1人対多数のときには、アンバランスパワーだ。」とか、「前にいやなことをされたからやり返したというのは、シンキングエラーだから正しくない。」というように学んだことを使って子どもたちなりに解決しようとしている姿も見られます。

### (4) 令和4年度文部科学省委託事業「いじめ対策・不登校支援等推進事業」:「こころとからだの連絡帳デイケン」(デイリー健康観察)

令和4年度文部科学省委託事業では、これまで各学校にて行ってきた日々の健康観察をデジタル化し、個別に支援する視点からのアプローチや気軽にSOSを発信することができる科学的根拠に基づいた「こころとからだの連絡帳デイケン」を活用し、調査研究を行った。調査研究をする中、この「デイケン」を、教師の子供理解の幅をさらに広げ、かつさらに深めることを補完するためのツールとして活用できるのではないかと考えた。

これまで、教職員は一人一人の子供を理解するために、できるだけ多くの気づきを得ることができるよう努力してきた。そしてその背景を知ることによって、子供への理解を深め、その子供に応じた

対応を検討し支援を行ってきた。このデイケンを使うことが、個に応じたより適切かつ的確なアセスメントの一助となることを期待している。

「デイケン」の導入にあたっては、アセスメントに基づくプランニングそして子供への支援等、その子供に関わるすべての大人がその意義を理解し積極的に取り組んでいくことが大切であると考え。

いじめからスタートした取組であったが、3年を経て、いじめだけではなくすべての子供を対象とした魅力ある学校づくりにもつながった。学校が、「誰一人取り残さない」、すべての子供たちにとって魅力のある居場所となるよう、「挑戦」をし続けなければならないと決意を新たにしているところである。

#### 4 吹田市の挑戦② —デジタル・シティズンシップ教育—

「グローバルで革新的な扉をすべての子供に」を意味する GIGA スクール構想は当初5カ年計画で進む予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、2020年度内へと前倒しされた。それにより、1人1台の学習用端末が導入され、学校の情報化が一気に進展した。デジタル世界を生きる子供の「学習権」と「発達権」を保障するために必要となる教育は何か。ここでは、吹田市の挑戦②と題し、ICT教育の土台に人権教育として位置づけ推進してきた「デジタル・シティズンシップ教育」の取組について紹介する。

##### (1) 令和元年度・令和2年度「GIGA スクール構想」の実現に向けて

「1校に43台」から「1人1台」の学習用端末配備により、学校の教育環境は大きく変化する。GIGA スクール構想をどうとらえ考え方の軸足にするのか。捉え方次第で、今後の教育の方向性が決まる。吟味を重ねた結果、吹田市教育委員会として GIGA スクール構想を「多様なすべての子供が端末を学習用道具として使用可能になることにより、従来より取り組んできた個別最適な学びを加速度的に充実させることができ、その結果、誰一人取り残すことのない教育環境を実現することができる、実に可能性の広がる構想である」と捉え、実現するために必要な教育は何かを考えた。

吟味を重ね、自らの判断と責任でテクノロジーを積極的かつ安全に活用し、デジタル社会の善き担い手を育成する「デジタル・シティズンシップ教育」こそが**必要な教育**であると判断し推進していくことに決めた。

##### —デジタル・シティズンシップ教育の推進のための準備—

吹田市には「ともに学びともに育つ」人権教育を大切にしてきた歴史がある。教育センターもそれを基盤として様々な事業を進めてきている。前述のいじめ予防授業も然り。いじめ予防授業「TRIPLE-CHANGE」では、目の前で起こっている事実気づき、そのことについて立ち止まって考え、主体的に行動を起こすための知識とスキルを学んでいく。このことは、不安・心配な状況に直面したときにその原因は何か、そのために責任をもってどう行動したらいいのか判断するための方法について学ぶデジタル・シティズンシップ教育と親和性がある。このこともデジタル・シティズンシップ教育推進のエネルギーとなった。

まずは、ICT教育グランドデザインを作成するにあたり、その土台に人権教育としてデジタル・シティズンシップ教育を位置づけた。

次に、この新しい教育《GIGA スクール構想による1人1台端末を活用した教育及びそれと両輪で進めるデジタル・シティズンシップ教育》を学校現場と教育委員会がともに進めていくための準備として、①授業内容のカリキュラム化②管理職を含めた全教職員対象研修の実施③パイロット校の選定(小学校1校・中学校1校)④公募制研究会の発足に取り組んだ。

特に④公募制研究会は大きな成果を生み出した。研究会には、校種、教科を越え約70名の教職員が集った。

研究会では、①教職員が一丸となって取り組むためのスローガンとそのストーリー②積極的な活用を促す資料や動画の作成等、それぞれが得意分野で力を発揮した。



## (2) 令和3年度「GIGA スクール構想元年」の取組

準備期間を経て、いよいよデジタル・シティズンシップ教育を全市立小中学校でスタートさせた。道徳や総合的な学習の時間、特別活動のうち年間4時間、米国の教材「コモンセンス・エデュケーション (Common Sense Education) を活用して授業を進め、9年間の学びを通してデジタル・シティズンシップ教育の6領域を網羅することとした。

授業では、デジタル空間の場も公の場であること、重層的で複雑なデジタル空間の仕組みからリスクを理解すること、また安心安全に利用するためのデジタル空間での振る舞いについて「対話」を通して一人ひとりが考え自分なりの納得解を言語化することを大事にしていった。

### <デジタル・シティズンシップ教育の6領域>

メディアバランスとウエルビーイング	ニュースとメディアリテラシー
プライバシーとセキュリティ	対人関係とコミュニケーション
デジタル足跡・アイデンティティ	いじめ・もめごと・ヘイトスピーチ

スタートするにあたりポイントとした3点は以下の通りである

- 1点目 共通の軸足を明確にすること
- 2点目 授業では「対話」を大事にすること
- 3点目 シティズンシップ教育であることから、子供を囲む大人をいかに巻き込むか

「巻き込む」ために、子供たちが見た動画を帰宅後、保護者と共有できるようQRコードと保護者欄を設けたワークシートの作成、国際大学 GLOCOM 准教授の豊福晋平先生による保護者理解促進のための動画配信、豊福晋平先生と鳥取県デジタル・シティズンシップエドゥケーター・国際大学 GLOCOM 客員研究員の今度珠美先生を招聘し開催した市民対象講演会などを企画提供した。

### (3) 令和4年度「GIGA スクール構想2年目」の取組

続く令和4年度は、経済産業省の STEAM ライブラリーに公開された教材も取り入れカリキュラムを刷新し、各校で取り組むこととした。

GIGA スクール構想2年目、3年目を迎える節目の年として位置づけ、その成果と課題を把握するため全市立小中学校の授業を参観。子供たちが積極的に ICT を活用することにより、教師の先に行く姿も見られるようになった。そうしたときに大人はどう対応すればいいのかデジタル・シティズンシップ教育は、その考えるよりどころになっている。

子供たちの「やりたい」「学びたい」「知りたい」…多くの「～たい」の実現により、自らの学びを広く深くそして豊かにして欲しい。豊かな経験を大人の見守りによりさらに大きなものとしてやりたいと強く願う。

### (4) 令和5年度において

学習指導要領では、前文に「持続可能な社会の創り手を育てることを目的とする」と明記され、「自ら考えて判断し行動できる子供を育てること」を示している。

デジタル社会を生き抜く子供に、自ら考えて判断し行動できる力をつけていくための基礎となる教育は必要不可欠である。それを認識し取組を深めている学校もここ 2 年で確実に増えてきている。今後、9年間の学びの実践の積み重ねを大切にしていきたいと考えている。

教育はその時々々の社会状況に大きく影響される。教育の情報化により学校環境は社会状況とシームレスになった。シームレスになったことにより必要になった教育が、デジタル・シティズンシップ教育。これは今後、全世代に必要な教育になると考える。9年間で学びを重ねた吹田の子供たちがデジタル・シティズンシップの考え方を発信する側になる日も近いかもしれない。教育から社会をデジタルインクルージョンにする可能性を信じたい。

## 5 これからの教師に求められること

教育センターの取組においては、持続可能な社会の創り手に求められる「自ら考え判断し行動する力」「共感力」「メタ認知力」の育成をめざしている。これらは、学習指導要領がめざすところでもあることから、大人も子供も共につけたい力であるといえる。これら 3 つの基本的な力をベースに、特に初任者に対して「これからの教師に求められること」として伝えている4点についてお示しする。

- ① 一人一人の多様な幸せ (Well-being) 実現のため  
→常に一人一人の子供をみつめ、その子供にとっての最善を考えること
- ② 子供の主体的な学びの実現のため  
→ティーチングではなくコーチング:「教師は学びの伴走者」であること

- ③ 一人で抱え込まないために  
→協働性・同僚性を身につけること
- ④ ①～③を真に理解し、仕事をするため  
→常に教師も主体的に学び続けること

## 6 まとめにかえて

「そっと、肩に手を置いてお手伝いできることはありませんか。」

「目を見て口元を見て初めて分かることはいっぱいあります。」

そんな経験のできる介護等体験の素敵なことをガイダンスで話していた2019年度。

➡ その次の年から「介護等体験」は実施されていない。

「寄り添うって何？本当に寄り添いたかったら、授業だけじゃない、いろんなところで一緒に過ごすこと、声掛けを忘れずに。給食だってチャンスタイム！」

➡ 黙食・・・給食中は話せない。

この5月には「コロナ」は5類に変わるようだ。

では、学校生活や子どもたちを取り巻く状況も徐々に元に戻るのだろうか。

否。わたしは完全に元に戻ることはないとはないと考える。コロナ禍で失ったものは多かった。しかし、その中で新たに分かってきたこと、大事にしなくてはならないことも明らかになってきた。そのことを置いて先に進むことはもうできない。学校教育に携わるものとしてそのことへの共通理解、せめて現状認識の一致は大事にされなければならない。

状況に関わらず、学校という社会で子どもたちは間違いなく人との繋がりの中で生きており、そこの経験を通して人格を形成していく。距離をとっても縮めても、「たのしいこと」「つらいこと」「学ばべきこと」は形を変えながらも必ずあり、そこに対応できる「先生」が求められていることも間違いない。

今回提起のあった「いじめ授業」「デジタル・シティズンシップ」の取組は現場での先行的な取組であるとともに教育の持つ「不易」の部分でもあるということ、我々は常に意識しておかねばならない。

これからの10年は、今までの10年よりもそのスピード感も容量も変化の度合いも格段に幅を広げるに違いない。教室の在り方や教員の在り方も大きく変化することは想像するに難くない。そうした状況への対応力を求められるのは学校現場だけではない。教員を輩出する大学や育成を目途とする教育委員会にとってもそれは喫緊の課題であり、その課題を見誤らない現状の把握が我々大学教員に求められていることを肝に銘じたい。

### <引用・参考文献>

- ・ 草場敦子(2023年2月17日)文部科学省委託事業 令和4年度いじめ対策・不登校支援等推進事業「いじめ・不登校の未然防止に向けた魅力ある学校づくりに関する調査研究報告会～『デイケン』を活用した科学的な根拠に基づくいじめ等の予防の実現～」報告資料
- ・ 文部科学省 いじめに対する理解を促す動画教材「ともだち・かかわりづくりプログラム」



[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1406070\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1406070_00001.htm) 令和4年6月

- ・ 吹田市立教育センター「GIGA スクール構想」

<https://www.city.suita.osaka.jp/kosodate/1018299/1018324/1003450.html>  
2022年10月3日

- ・ 草場敦子(2021年5月)「【Update for the Future】マナブ×ヒラク=ミライ」吹田市立教育センター センターだより 第1号